ビッグ・マネー

三好徹

ビッグ・マネー
三好徹（みよしとおる）
© Toru Miyoshi 1991

1991年3月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 東京(03)3945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184872-0

講談社文庫

ビッグ・マネー

三好 徹

目次

新入社員 7
怨念 29
闇の声 51
大暴落 72
裏に道あり 93
一匹狼 115
敗北の教え 138
欲望の限界 160
転身 183
歳月 205
転機 226
めぐり合わせ 247
独りごと 270
仕手戦 292
落とし穴 314
伝説 336
解説 佐高信 357

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ビッグ・マネー

新入社員

1

大川金造の朝は早い。

目を覚ますのは午前五時である。枕もとに置いてあるラジオがタイム・スイッチで入力し、放送をはじめる。それが目覚まし時計の代わりであった。

ラジオはニュースで一日の放送を開始する。金造はふとんにくるまったまま、それに聞き入る。そして、ニュースを聞き終わると、ゆっくりと起き上がり、丸裸となって乾布摩擦をする。乾いたタオルで全身をこするのだ。

真冬の寒気のきびしいときでも、彼は一日としてこれを怠ったことはない。約十五分間、全身摩擦し終わったころには、身体が赤くなっている。若いころ旧陸軍の学校に入ったときからの身についた習慣だった。すでに六十歳をすぎているが、かぜひとつひかない健康を保っているのも、この毎朝の習慣のせいだ、と信じている。

金造の寝室は二階にある。和室の十畳間で陽当たりはいいが、暖房も冷房も入っていない。もちろん、それを備え付ける金はある。現に、彼の寝室以外の部屋には、空調装置がとりつけられているのだ。しかし、金造は、人間たるもの、暑さ寒さをじかに肌で感じた方がいい、と思って

いる。日本のように、四季の変化に恵まれた国に住んでいながら、夏も冬も一定の温度を保つ空調装置の中で暮らすのは、愚の骨頂だ、と考えている。

乾布摩擦を終えると、金造は和服を着込み、座禅を組む。六時にはやめて、こんどはテレビをつけてニュースを見る。そのあと、新聞に目を通す。新聞は、東京で発行されている一般紙すべてと経済紙のほかに左翼政党の機関紙も読む。スポーツ紙は講読していない。彼は、プロ野球のどのチームが勝とうが負けようが、まったく興味をもっていなかった。あるいは、誰かが世界記録を更新したとしても、どうでもいいことだった。

といっても、金造がスポーツを一切やらないというわけではなかった。ゴルフをするのである。

平均して、週に一度はコースへ出ている。連休のときなどは、泊まりがけで、伊豆のゴルフ場へ行くこともある。キャリアは十数年になるが、金造のゴルフはハーフで50を切ればいい方である。もっとも、金造には、上手になりたいという意欲がなかった。ビギナーのころは別として、いまではプロにレッスンを受けることも、練習場へ行くこともしなかった。

金造としては、歩くことが目的だった。18ホールを回ってくれば、約八キロは歩く結果になる。何もせずにそれだけの距離を歩くのはおっくうだが、ボールを打ちながら歩くと退屈しないのだ。

それに、ゴルフには別の効用もあった。彼が必要とする貴重な情報が入手できることもあるのだ。

また、いっしょにプレーする人の性格が、ゴルフをしているうちにわかってくることもあった。世間的には豪放な性格だといわれている人物が、じつはきわめて用心深い人であることを発見する場合がある。

しかし、週末や祭日以外に、ゴルフ場へ行くことはなかった。いわゆる接待ゴルフの口がかかってくることもあったが、ウイークデーである場合は、絶対に受けなかった。

それに、彼は百円単位であろうとも現金を賭けることはしなかった。前に、ある大会社の副社長をしている人物が同伴競技者となったときに、

「千円ナッソーでやりませんか」

と誘ったことがある。

ナッソーというのは、前半、後半の打数、トータルの打数の上下で勝ち負けを争うのである。全部負けても三千円である。

金造はことわった。相手は、

「どんなにスコアが悪くても、たった三千円ですよ。大川さんにとっては、何ということはない額じゃありませんか」

としつこく誘った。

それは相手のいうとおりだった。金造が日常的に動かしている金の大きさに比べれば、三千円程度の賭けは、賭けというに値しないものだった。

「そうですな」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

と金造はいった。

「では、握りましょう」

握るというのは、ナッソーでプレーする約束の成立を意味する。成立のしるしとして互いに握手するわけだが、じっさいに握手するわけではない。

「いや、わたしは握りません。あなたのいうように、三千円は大した額ではない。だから、わたしは、そうですな、といいましたが、それだけのことです。握るのは、おことわりします」

金造はピシャリといった。

相手は、毒気を抜かれたような表情になった。そのせいかどうかはわからないが、ホールアウトしたときのスコアは、金造よりも悪かった。金造の方は、良くも悪くもなく、日ごろと同じようなスコアだった。もし握っていれば、三千円の勝ちになるところだった。

「握らなかったおかげで、三千円の損を免れましたよ」

と相手はいった。

（バカな男だ）

金造は心の中でそう思ったが、表情に現すことはしない。

「そうでしたな」

といっただけだった。

何週間かたって、再びその男と同伴競技者となった。金造の入会しているゴルフ場は、メンバーの数が五百人足らずなので、メンバーだけのプレー日になる日曜日に行くと、そういうこと

はよくあるのだ。

男は、滝川という名前で、会社は一部上場の製紙メーカーである。

金造は、その会社については、さほど深く知っているわけではなかった。ただ、前日の株価が三三〇円前後だったことだけは知っていた。

「きょうは、いかがです？」

と滝川はいった。握らないかという誘いである。金造は、

「調子がよさそうですね」

「それがね、最低なんですよ。このところ、ボールがまっすぐに飛ばない。曲がって曲がって、どうしようもないんです。しかし、ただ歩いてもおもしろくないですからね」

「やめておきます」

と金造はいった。

「千円のナッソーですがねェ」

と滝川はいい、もう一人の同伴競技者を誘った。和田という医者である。和田は、握りに応じた。滝川のハンデは、和田と同じく24である。

その日の金造のゴルフは、アウト53、イン52であった。和田は、アウト50、イン54で回り、滝川は、アウト54、イン59だった。ナッソーは、滝川の負けである。スタートする前にいっていたように、滝川のボールは大きく右へ曲がり、林の中や崖下に打ち込むことが多かった。

ホールアウトすると、滝川は、

「やはり負けましたな」
といって、和田に一万円札を差し出した。
和田は、釣り銭がないから、この次までお預けしておきましょう、といった。
「そうですか。では、来週にでもまた……」
と滝川はいった。

2

次の週に、滝川と和田がいっしょにプレーしたのかどうか、金造にはわからなかった。ちょうど連休で、彼は、興和証券常務の畑山の招待に応じ、伊豆のゴルフ場へ一泊ゴルフに出かけたからである。
畑山とは、彼が自由が丘支店長をしていたころからの付き合いだった。金造をゴルフに誘いこんだのも畑山である。金造の家は、世田谷の奥沢にあり、興和証券の場合は、自由が丘支店の担当地域となる。といっても、金造がその支店を通して、株の取引をすることはめったになかった。当時もそうだったし、いまも同じである。
畑山と知り合うことになったのは、その支店に配置された若い社員のせいだった。昭和四十六年五月のことである。
金造は、毎朝、六時のテレビニュースを見終わると、ポストに新聞を取りに行く。

五月初旬のある朝、ポストの中でいっぱいになっている新聞を取り出して見ると、何か白い包みが残っていた。名刺をはさみこんだポケット・ティッシュだった。前夜に入れたものらしい。

金造は、名刺を屑籠に投げこみ、ティッシュだけを残した。いろいろな企業が、宣伝とサービスを兼ねて、その種のものをつくり、ポストに入れておくことがふえているのである。

次の朝も、同じだった。

金造は、はさみこんだ名刺を手に取って見た。

――興和証券自由が丘支店　相場太吉

という名刺だった。

金造は、その名刺の名前に目をとめた。

相場太吉と読むのであろう。

（これは本名なのか）

と一瞬思った。姓名だから、相場とは読まないだろうが、それにしても、妙に気になる名前だった。

この男は、金造のことを知っていてこの名刺を投げ入れておいたのか、それとも偶然なのかも、彼としては気になった。四月に入社した新入社員が、研修期間を終えて、各支店や営業所に配属される時期だった。特定の顧客をもっていない新入社員が、まずやらされることは、この程度のことである。おそらく、付近一帯の各戸に、投げ入れて回ったに違いない。

金造の家の表札は、単に、「大川」とだけ表記したものである。この相場という、カケダシの

証券マンが、金造の何者たるかを知っていて、名刺を置いたわけではあるまい。
だが、次の朝も、相場太吉の名刺はポストに入っており、日曜日を含めて、十日間も続いた。
そうなると、相場太吉がはっきりした目的をもって、その行為を続けていることは明らかだった。
そして十一日目の朝、名刺といっしょに、手紙が入っていた。
金造は、開封せずに破り棄てようかと思ったが、あて書きが、
「大川金造様」
となっていることに気がつき、読んでみる気になった。

冠省　突然のお便りを差し上げます非礼をどうかお赦し下さい。私は、今春、興和証券に入社し、当支店に配属となりました新人であります。目下お得意様回りをしておりますが、私の担当地域に、大川様のお宅のあることを知りまして、ひじょうな興奮を覚えております。
大川様が、株式市場においていかなる存在であるかは、この世界に飛びこむ前から聞き知っておりました。また、大川様がお取引きなさる会社がわが社ではないことも存じております。にもかかわらず、このようなお願いをするのは、まことにあつかましいとは承知しておりますが、一度ご引見の栄を私に与えて頂きますれば、この上ない喜びであります。
貴重なお時間であることは、もとより存じておりますが、ご都合のよろしい時に十分あるいは五分なりとも、お時間を頂戴できますれば、こんなに嬉しいことはございません。お電話を賜

ればありがたいと思います。末筆ながら貴家のご繁栄を祈念致します。

字は上手ではないが、一字一字きちんと読みやすく書いてあった。

（読まなければよかったな）

と金造は思った。

こういう一方的な手紙は迷惑であった。面会を強要しているわけではないにしても、多少とも心理的な負担を感ずることは確かである。

金造は、手紙を屑籠に投げこんだ。会ってやろうという気はなかった。

手紙が入っていたのは、その日だけだった。しかし、ポケット・ティッシュと名刺は、いぜんとしてポストに入っていた。

それが一ヵ月近く続いたころ、金造は、業界新聞の主催したパーティーに出た。その新聞の編集局長をしている梶村とは何回かいっしょに食事をしたことがあった。

パーティーは立食形式のもので、出席者は百人前後だった。

金造は、そういう場所へはめったに顔を出さないのだが、そのときは、梶村に会って話を聞きたいことがあったのだ。

梶村は、金造の姿を見ると、すぐに寄ってきた。

「お忙しいところをどうも恐縮です」

と梶村は頭を下げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com